

大 学



ヨット部練習風景

これが同志社大学の今の姿だ、といえるような絵を描いてみせることは、恐らく誰にも不可能な芸当であろう。二万人の学生、七百名の教職員、六つの学部、三つの研究所、図書館、学生会館、厚生館、京都とその周辺に散在する体育等の諸施設のすべてを概観するだけでも大へんな骨折りである。けれども、同志社に所属し、同志社に育てられ、同志社のためにいささかの力をつくそうとしている者であれば、同志社の現況について、何らかの統合的な絵がない筈はない。そこで私は、主観的におちいることを恐れずに、与えられた課題に取り組んでみたいと思う。客観的な統計の数字を並べるだけで、はい、これが現況でございます、ということにはしたくないのである。私は「同志社の建学の精神と、キリスト教教育は今どうなっているのか?」、「同志社の教職員、学生は今どうしているか?」、「キャンパスに今どのような変化が起こりつつあるか?」の三点にしぼって、せいじっぱいの絵を描いてみたいと考えるのである。

百年前に新島襄が目標として打ちたてた建学の精神は、キリスト教主義を徳育の基本と

して、知識、見識、良心をそなえた、明日の日本を作る青年を輩出することであった。学生数二万人を擁する現在では、キリスト教教育の徹底を期することは不可能に近い。現在神学部、文学部、法学部、工学部では、一九四八年の新制大学発足以来の「宗教学」が必修科目として課されている。大学のチャペル・アワーは一部が水曜日、二部が火曜日に守られている。宗教部はいくつかの意欲的な課外講座のプランを組んで実践にはげんでいる。前期末には文学部が独自の礼拝の時間を持った。また最近では松山学長、遠藤宗教部長の熱意によって、各学部の「宗教主任」の制度が復活したので、宗教教育の内実化が前進することが期待されている。

同志社のキリスト教教育について悲観論者は、学生数が二千名程度のこぢんまりした規模から、たちまち一万を突破し、二万にまでふくれあがった時、もはや同志社はキリスト教教育を放棄したも同然だったと嘆く。学生数二千ならば、オックスフォード、ケンブリッジ、ハーヴァード、アーモストのように全寮制を敷き、二十四時間式の全人教育が可能であり、これこそが新島の念願した理想であ



図書館
開架閲覧室

ったとも思われるからである。キリスト教教育は究極的には人格的な出会いとふれ合いによって全うされるものである。

逆に楽観論者は、学生数二万を戦後の私立大学の必然的な成行きであったと見る。そして現代のような、「ポスト・モダン」の時代には、キリスト教教育をむやみにおしつけること、メリットだけでなくデメリットも生じること指摘する。実例として彼は岩倉、香里、女子高からの進学者の中に、宗教的感受性の全く麻痺している学生がたくさんいることを発見して愕然とする。いずれにしても、真のキリスト者は、どんな社会においても少数者なのだから、不十分に見えても辛抱強く、現在の方式をこつこつと続けながら、心ある少数の学生を捉えることを念願している。

ところで、今や同志社は非常に入学しにくい大学になったという苦情をよく耳にする。東大、京大にくびすを接して、慶応、早稲田同志社などの私学の雄が、入りにくい大学のランクにあがっているようである。時々、同志社に失敗したが京大に合格した、というような話を聞くこともある。また入学者の出身の分布を見ても、北は北海道から南は沖縄ま

で、まさに全国を網羅していて、今や同志社は京都、大阪を中心とする地方の大学ではなく、まさに全国的規模の大学となっていることも事実である。しかも同志社は、日本全国から秀才を集めているのである。

現在の学生はあまり授業をさぼらないのが特徴だとよく言われる。すべての科目の内容が一挙に高まり、授業が面白くなるということとはまずありえないから、これは国際的な不況の反映だと見るのが妥当かもしれない。なるべく点数を稼ぎ、なるべく就職に有利な条件をつくり出そうというのである。しかし、このチャンスを利用して教師の側でも、一層面白い授業内容にして学生を知的に刺激し、講義とはこんなに面白いものであったのかと見直させるようにすれば、一層よいのではなかろうか。

他方、現在の学生の課外活動に対する熱の入れ方にも驚かされる。昨年、新町校地の北西隅に建てられた音楽演劇総合練習場「新町別館」は、竣工以来、規律正しく、フルに活用されて今日に至っている。発声練習やオーケストラの騒音に悩まされた付近の住民や新町研究室の人々も、ついに騒音から解放され

る日がきた。しかも日々の練習は熱心に、おそくなるまで続けられている。最近、グリーンクラブがアメリカに遠征して好評を博した。

スポーツの方面でも今の同志社は目をみはらせる。ヨット、洋弓、相撲、ボート、準硬式野球は全国第一等の成績だったし、剣道個人、自動車各種の成績もめざましかった。水泳は関西ではもう競争相手がないという。

正課の方面では、最近のカリキュラムにおける目立った改革は、総合科目が一般教育科目の中に設置されたことである。「京都の自然と文化」・「公害」・「コンピュータと現代社会」といった主題が、複数の担当者により人文、社会、自然科学の分野にまたがって総合的にアプローチされていく。この試みは最近のカリキュラムに新風を吹き込んだ。

また各学部の努力により、教員の数的、質的な拡充にも年々顕著な成果があがっている。在外研究員の制度により、現在では年間十一名の教員と、一名の職員を大学の研究費で留学させている。このほかに、国内研究員の制度もあり、研究員になると半年間授業を免除されて研究に打ち込むことができる。

国際交流の視点から現在の同志社を見ると

き、同志社は百周年を期して国際的に飛躍するときにきた、というべきであろう。最近、宣教師の中から、グラント教授の急逝、ロイド教授の病氣退職が相つき、純粹の宣教師は神学部深田先生一人になってしまった。同志社百年の歴史の中で、戦争中をのぞき、宣教師一名ということは創設期以来恐らくなかったことであろう。しかし、このことは時代の趨勢を反映している。同志社は何年も前から精神的にひとり立ちする時代に入っているからである。一方、アーモスト大学との間の長い交流は続き、アーモスト大学代表のケリー教授は、文学部教授として健在である。百周年を記念して、アーモスト大学の誇る米国家家コマジャー教授が同志社で記念講演したのは、去る五月のことであった。またカールトンやアーモストを中心として、二十名ほどのアメリカの学生が、同志社を中心として一年間留学する制度(associated Kyoto Program と呼ばれる)も続いている。しかし、東南アジアからの留学生は、現在のところわずか数名にすぎない。

キャンパスの建物に目を転じるとき、現在の同志社が誇ってよいのは何といっても大学

図書館である。二年前に完成したこの図書館は今出川校地の西南隅にあり、建築的にも非常にすぐれており、設備の面では全国有数のものである。完全開架式をとり、内部のもようも昔の図書館とは全く異なっている。アメリカに留学した者は、アメリカの大学図書館にさまよいこんだような錯覚をおぼえるという。閲覧座席は千二百を教え、冬には暖房、夏には冷房が入る。はたせるかな、図書館の利用者数はめざましくふえた。

同志社で、終戦後さいしょに建設された有隣館が、四半世紀にわたる役目を終えて、この夏休みに解体された。そのあとには五階建ての法経研究室がたてられようとしている。従来、研究室といえば、教室棟の最上階に作られるのが常であったが、今回有隣館あとに出来る大規模な研究室棟は、この種のものとしては同志社ではじめてである。

以上、一瀉千里に概観してみた。紙数の制限もあって多くのことを書きおとした。不完全かつ主観的にすぎることをご意図しながら、これをもって現況のスケッチとさせていただきます。

女子大学



キャンパスでいこう女子学生

同志社女子大学は、文学部（英文学科・音楽学科）、家政学部（家政学科・食物学科）の二学部、大学院文学研究科、家政学研究科の二研究科からなり、約二、九五〇名の学生と専任七十七名、嘱託百二十九名の教授陣を擁している。以下、各学科、学寮などについて現況を紹介したい。

英文学科 創立一〇〇周年にふさわしく、本年四月から大学院に博士課程が発足し、一、七五二名の学生（学部一、七二五名、修士課程二十六名、博士課程一名）と二十八名（内、外人四名）の専任教員を擁している。昭和四十七年度から新カリキュラムがスタートし、本年度をもって完成する。新カリキュラムの主な特徴をいくつかあげてみよう。

英米文学史が、三年、四年から一年、二年におろされ、三年、四年での科目選択および卒業研究に便宜を与えている。

二年生の必修科目として英米人教師による英米文学の背景がおかれ、一年生のオラルイングリッシュを土台に、上級での英米文学研究のための背景的知識を与えるようになっていく。

三年生から、文学、語学のどちらかを重点

的に履修できるように科目編成になっており、四年生では文学研究、語学研究のゼミを専任教員が担当している。この科目は、一年生の英作文および、オラルイングリッシュの小クラス制と共に、将来期待の持てる科目である。

本年からは、シェクスピア劇は、シェクスピア・プロダクションを選択必修した四年生が、単位の一部として上演することになっている。

教員免許状を希望する学生には、一年生で、L・LのAudio Englishを必修科目にしたのも特徴の一つであろう。

学部組織とは別に、同志社女子大学英文学会（在学生、卒業生、教員を正会員とする）が昭和四十二年に発足し、年次大会のほか、機関誌「アスフォデル」、「ハルシオン」の発行、奨学金の給付などの事業を行っている。

七月二十二・三両日に、第十四回語学ラボラトリ（LLA）学会全国大会が女子大で開催されたこと、またミルトンセンタールが女子大におかれることになり、第一回研究会が七月十八日に開催されたことも、創立一〇〇周年にふさわしい出来事として特筆しておきたい。

い。

音楽学科 二年前に、創設期よりの指導的存在であった中瀬古和教授の死去という試練をうけたが、昨年度より研究助手一名を補充して、一応専任教員十名の体制を回復した。

その顔ぶれは、有賀のゆり(主任、鍵盤音楽・宗教音楽)、駕淵邵子(絃楽・教授法)、駕淵紹子(鍵盤音楽・音楽史)、石村雅子(音楽)、今城淳行(音楽・指揮法)、小関幸子、中村利男(音楽)、尾見八重子、笠原進、福本俊之(ピアノ)の諸氏であるが、古いものも新しいものも卒直に意見を出し合い、ともに学科の質的向上のために情熱を傾けている。

学生の総数は百十二名で、内約半数がピアノ、残りがバイオリンと音楽専攻である。教育の基本方針としては、実技、理論、音楽史系列の諸科目を同等に重視し、その底流にあるキリスト教とも関連させながら、総合的に音楽を把握する力を養うことを目指している。毎週木曜日の音楽礼拝は音楽学科が企画し、教員および学生が積極的に参与するのもこのためである。

定例行事として今年も、教員による「音楽学研究発表会」(十月二十四日)、学生を主体

とする「定期演奏会」(十一月一日)、「メサイア演奏会」(十二月二十五日)に加え、昨年中止になった京響との協演によるベルディの「レクイエム」(十二月四日)が実現される予定。また、春のヨーロッパからの来日教授による二つの特別講座に続いて、秋にはフライブルグ国立大学ピヒト教授によるレクチュア・リサイタルが計画されている。さらに、本年は特に創立一〇〇周年を記念して、卒業生による公開発表会、「第一回頌啓会演奏会」(六月二十八日)が開催された。

一般教育 昭和四十六年春から審議を重ねてきた一般教育のカリキュラムの改正も、ようやく専任教員十四名を擁して、昭和四十九年四月一日から実施の運びにいたった。

改正の主な点は、従来、二次次までに履修しなくてはならなかった一般教育科目は三年次までのび、専門科目とのいわゆるクサビ型に変更されたこと、そして新たに「西洋思想史」、「言語と文化」、「自然人類学」、「文化人類学」、「地球の科学」の五科目が増設され選択の幅を少し広げたことである。

牛歩に似たりとはいえ、一般教育の欠陥とされているものが是正されつつあると言えよ

う。しかし、他学に先んじて設けられていた本学独自ともいえる総合科目的な「人間関係」が、種々の事情により本年をもって二十六年の歴史を閉じた。この教科のため長年努力された福原春代先生の功績は忘れられてはならないことである。

家政学部 家政学部は家政学科、食物学科(食物学専攻、管理栄養士専攻)の二学科と、大学院家政学研究所食物学専攻からなり、在籍者は家政学科四二〇名、食物学科六三〇名、大学院八名である。また、専任二十三名の教授陣を擁している。

学部組織とは別に、同志社女子大学家政学会(在學生、卒業生、専任教員を正会員とする)が昭和四十二年に発足し、年一回の機関誌「同志社家政」のほか、奨学金の給付、研究会、見学会などの事業を行い、家政学部の研究活動を側面から支援している。

家政学部がかねてから担っている課題の一つに、各学科、特に家政学科をどのように充実発展させていくか、専門教科内容を中心とするカリキュラムの再編成があり、その第一歩として四十九年度入学生より、カリキュラムがかなり大幅に改正された。この改正は本

学の一般教育カリキュラムの改正と、法令による管理栄養士課程カリキュラムの変更にタイムリングを合わせて、学部全体のカリキュラムを改正し、実施に移したものである。



実験風景

新カリキュラムの特色ともいえるべき点を簡単に紹介しておく。

まず、家政学科については、家政学の五つの柱である被服、食物、住居、児童、家庭経営の各概論を一年次に必修し、二年次以上において家庭経営、児童、被服の三系列から希望する系列の科目を集中的に選択し、いずれかの分野を特に深く研修できるように編成されている。また、食物学科については、各専攻とも一年次に基礎科目として前記概論を履修することになり、二年次から異なった内容を学ぶことになる。食物学専攻では、食物学の中で食品から調理までの段階を専門的に学ぶことに力点が置かれ、調理学を中心とした学科編成になっている。管理栄養士専攻では、栄養学およびその関連科目を実験、実習、演習を中心に学ぶことに重点がおかれている。

これら新カリキュラムの実施は、学部の研究教育設備および施設、時に実験室、実習室、演習室等の拡充を前提としたもので、そのために楽真館第三期建築が予定されていた。この計画の実現が不可能と考えられる現在、早急にこれに代るべき施設の建設が切望される。

る。

学寮 近年、寮を有する各大学では、「寮」の位置づけや、その管理・運営に大きい課題を負い、「教育寮」か「厚生寮」かと論じられている。本学学寮は、同志社百年の歴史の良き伝統の歩みの上に、過去、学内、学外に数多くの、大小さまざまな学寮として種々の歴史を刻み、明治・大正・昭和期に、それぞれの学寮は本学の女子教育の一翼を担ってきた。その根底にある学寮の精神は、「学寮を設置し、希望により学生を入寮させ、本学の理想実現のための有用な一機関とする」（本学学則第十五章附属施設第五〇条）および「本学学寮は立学の精神であるキリスト教主義に基づいて人格の向上に努める」（本学学寮規則総則第一条「上記の趣旨にしたがい、寮生は寮の諸規則を守り、自治的に規律正しい共同生活を営むように努めなければならない」（同二条）等とあるように、「教育寮としての性格をもち、学寮に従事する寮務主事、寮務係の指導、助言のもとに、寮生たちの自主的な活動によって運営されている。統合、廃寮等の歴史を経て現在の学寮は次の四寮である。学内には、新心寮（昭和三〇年四月、以後三期にわた

り増築、定員二二二、常盤寮(昭和三年八月)、定員六〇名、昭和五十一年三月末をもって廃寮、学外には、聖州寮(昭和二十八年九月)、定員七四名、鶴山寮(昭和四十四年四月)、定員一六二名。

現在、学寮は、いわゆる「教育寮」の精神をいかに管理・運営面において実現するかという困難な課題をかかえた時期にあるといえる。学寮職員の勤務などの問題、本学直営による各寮食堂の在り方、また受益者負担の原則に基づく寮生の経済的負担の問題などがそれである。

そのほか昭和四十年度に設置された女子大学研究所は、特定の研究目的や課題をもって発足したのではなく、教員の研究活動を促進し、質的向上をはかることが目的であった。

在外・国内の研究に対する助成、個人・共同の研究に対する助成金の交付等によって、大学の研究活動はきわめて活発、注目すべき研究成果の発表も多い。特に昭和五十年年度には卒業生の寄付の積み立てが一千万円の目標額に達し、この果実をもって年々の研究に有効な使用が期待されている。

また、大学の教育・研究のセンターともいふべき図書館の新設が数年前から計画されて

いたが、ようやく今年度の建設予定のうちにその具体化がすすめられるに至った。目下の蔵書約一〇万冊もやがて倍増し、大いに教師学生の研究・教育を助けることとなる。

つぎに、本学教育の中心ともいふべき、キリスト教々育について一言したい。毎日の礼拝は一講時と二講時の間、二〇分を用いて行われている。学内の教職員の奉仕、同志社大学神学部教授や教会の牧師のご協力をも得、

また、音楽学科の先生方の奏楽、学生聖歌隊のレスポンス等、音楽礼拝や学生礼拝のプログラムも毎週組まれて、簡素ながら充実した礼拝が守られている。学生の出席は、特別礼拝の日を除くと二〇名から五〇名前後の少数であることが多く、残念である。貴重な礼拝

の時間を全学的に有効な教育の機会とした。栄光館三階の瞑想室や小礼拝堂も随時、自由に用いられている。本学のカリキュラムには、基準の一・二四単位の枠の外に、「聖書」六単位が必修科目として課せられている。キリスト教々育の効果を客観的に測定することはきわめて困難であるが、学生の態度はさまざまであっても、かなりの程度に学生の精神生活に影響を与えていることは、過去折々の

調査等の結果で確かめられている。今後、宗教学委員会などを中心に全学的なとりくみの必要な問題であると思う。

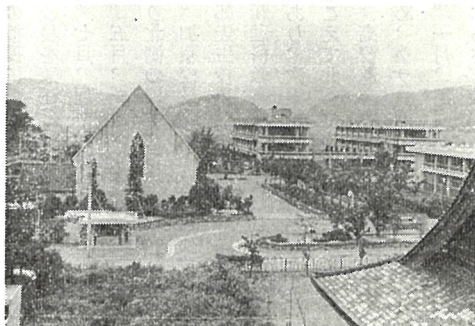
本学の施設・設備の面については、この一〇年間に楽真館二期建設、さらに頌啓館(音楽学科)、心和館(教室・研究室・学生食堂・保健室)等の新築と越智前学長のご尽力によってつぎに拡充がはかられたことは感謝にたえない。

また創立一〇〇周年を記念して、女子大学に一億円の基金をという前学長時代からの計画が、毎年の新入学生からの募金によって、今年ようやく達成を見たことも、まことに大きな喜びであった。この基金の運用については、目下委員会をつくって検討中である。

以上、簡単に学園の紹介をしてきたが、創立一〇〇周年を契機として、教室、実験設備、研究室の充実、図書館の建設などの計画もすみやかに実現されることを念願すると共に、同志社立学の精神を再確認、さらに実りのある女子教育に向かって全学をあげて努力したいものである。

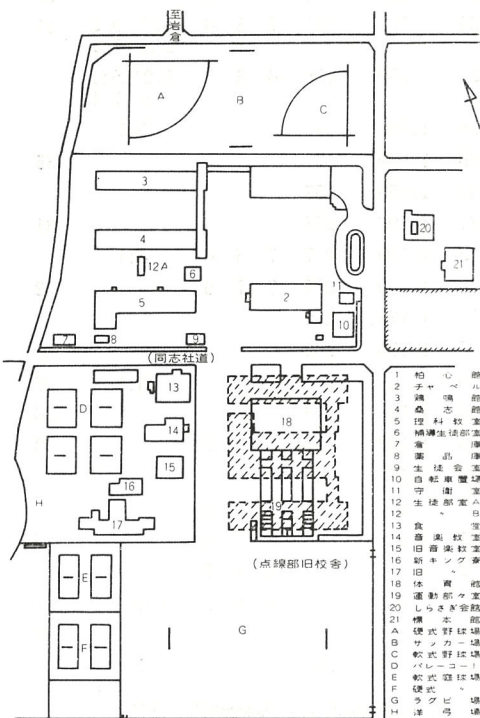
(女子大学教授・小田 幸信)

高等学校



岩倉キャンパス

高等学校配置図



同志社高等学校の、発足時よりの簡単な沿革を、生徒数教職員数を中心にとどり、現況の具体的理解に資したい。(別表参照。)

昭23。学制改制にともない、旧制同志社中学の第四学年以上を含んで同志社高等学校発足。校長、故山田貞夫先生。教頭、中堀愛作先生。

昭24。三月、第一回卒業生を送る。同時に岩倉へ移転。旧高商の校舎に移り、高商は今出川へ。中学と高等学校をわけた方が教育的

によりよいという理念に基づく処置と聞いている。

校舎は、いわゆる同志社道(地図参照)の南側にあり、学園生活はこの道より南側で主として展開されていた。

昭25。四月、男女共学となる。ただし一年で女子のみの一クラスをつくり、授業は男女別々で初期共学の段階。

昭26。男女混成のクラスとなる。女子のいないのは三年のみ。六月、山田校長退職、香

里中高の校長に転出。中学校長加藤延雄先生、高校長を兼任。

昭29。七月、理科教室焼失。

昭30。五月、チャペル落成。始めての同志社道より北側の校舎。

昭31。加藤校長解兼任。同志社教会牧師、茂義太郎先生校長就任。教頭、高橋勘先生。

九月、新理科教室落成、これも同志社道より北側にあり、次第に学園生活がこの道をこえて北へ。

昭32。高校進学者数急増に対応するため、クラス増を考える。

昭34。一月、鶏鳴、桑志の教室棟及びしらさぎ会館落成。旧高商の老朽校舎から新しい鉄筋コンクリート造りの校舎に移る。これらの建物はすべて同志社道より北側にあり、学園生活の中心が北へ拡張されて行く。学内の管理機構が改められ、総務・教務・補導・生徒・宗教・図書・保健の各部と寮務の八部門で出発。教育内容の充実を図る。

昭37。九月、茂校長停年退職。

新校長、高橋勘先生。教頭、浦野信夫。十月、文化祭で爆発事故。

昭38。三月、理科教室(管理棟)、柏心館増築部落成。各学年のクラス数増を図り、クラス生徒数四五名をめざし昭43に実現する。

昭39。文化祭が岩倉祭となり、「どんち」は廃止。修学旅行も廃止される。「新しい酒は新しい革袋に」という趣旨。

昭41。九月、旧校舎跡に新しい体育館が立つ。岩倉キャンパスの優雅さと、教育内容の充実が増し加えられる。

昭46。校長、浦野信夫。教頭、上田堅一郎先生。十一月、学費値上げ反対で生徒大会は無期限学ストを決定。十日間にて解除。学校は特別教育活動の一環として取扱い指導する。「現況」三百坪近いキャンパスの理想的な

生徒数・教職員数

昭和年	生徒数		クラス数			1クラスの比 1年 2年 3年 の男 女	専任教職員数	
	総数	女子の内数	1年	2年	3年		教員	職員
23	652	0	5	4	3		19	6
24	782	0	6	6	4		26	13
25	824	44	6	6	6		32	
26	871	111	7	6	6	1年 9:2 2年 7:1	31	
27	952	176	6	6	6	1,2年 5:1 3年 7:1		
28	1,028	190				5:1		
29	1,030	173					35	
30	1,055	157						
31	1,096	168					31	
32	1,139	217	7	6	6	4:1		
33	1,169	257	7	7	6		32	15
34	1,178	275						16
35	1,156	262					36	20
36	1,134	268				3:1	40	
37	1,133	276					36	
38	1,133	297	8	7	7		43	
39	1,174	319						23
40	1,136	326	7	8	8			
41	1,088	296	8	7	8		46	
42	1,054	302	8	8	7			
43	1,079	323	8	8	8	1年 2:1	47	25
46	1,090	342					50	
50	1,100	380				2:1		

(大きな変数のある年のみを記載し、空欄は大幅な変化がないことを示す。)

学 園 紹 介

環境の中で、私学同志社高等学校の教育の充実を図っているが、多くの課題をもっている中で、これを解決し、時代の要請する知的教育に対応し、同志社の命である設立の本旨に即した人格形成をめざしている。

入学。同志社中学からの推薦入学者数は、最高三二〇名を占めた。この場合、本校学年定員が四五名×八クラスで三六〇名であるので、入試によって他の中学から受け入れる数は約四〇名である。同中よりの入学者の中で基礎学力の不十分なものに対する対応を考えると、えなければならぬ。

進学。大多数、約三三〇名は同志社大学への進学、他は国公立、あるいは他の私大へ進み、就職者はほとんどない。大学進学については単に名を求めるのではなく、自分の能力・個性に応じた選択がされ始められていることは、喜ばしい現象である。いずれにしても、われわれが送り出す卒業生が、それぞれの大学で十分な力を発揮できる素地

第3学年の必修科目、選択科目、およびそれらの単位数 (昭和51年度)

必修科目

学 年		1年	2年	3年
科 目	キリスト教学	2		1
	国語 現代国語	3	2	2
	古 典	2	2	3
社 会	地 理	3		
	世 界 史		4	
	日 本 史			3
数 学	倫理社会		2	
	政治経済			2
	数学 I	5		
理 科	数学 II		5	
	数学 III			4
	生物 I		3	
保体	化学 I	4		
	物理 I		4	
	地学 I	3		
保体	保 健	1	1	
	育 育	3	3	3
	芸 術	2		
英 語	音楽 I	2		
	美術 I	2		
	英語講読	2	2	3
ホームルーム	英 作 文	2	2	2
	英語演習	1	1	
	ホームルーム	1	1	1
合 計		34	34	24
一 週 間		34	34	34
一 時 間				
選 択 可 能 数		0	0	10
最 大 時 間 数				

1. 3年では(□)表の中から、最低6単位を選択しなければならない。
2. 取得しうる単位は最大10である。

選択科目 (□)

科 目 名		単位数
キリスト教学	特 論	2
	現代国語特論	2
	古 典 特 論	2
国 語	総 合 国 語	2
	地 理 特 論 A	2
	地 理 特 論 B	2
社 会	総 合 世 界 史	2
	世 界 史 特 論	2
	総 合 日 本 史	2
数 学	日 本 史 特 論	2
	現代思想特論	2
	数 学 特 論	2
理 科	数学演習 a	2
	数学演習 b	3
	理 科 特 論	2
保体	生 物 II	3
	化 学 II	3
	物 理 II	3
保体	地 学 II	3
	体 育 理 論	1
	総 合 体 育	2
芸 術	音 楽 II	2
	美 術 II	2
	英 語 a	2
英 語	英 語 b	2
	英 語 c	2
	英 語 d	2
第 外 国 語	ド イ ツ 語	3
	フ ラ ン ス 語	3
	中 国 語	3
家 庭		2

をつくること、又、更に社会に出て、同志社教育の目ざす人間として活躍し、国家社会、世界に貢献できる素地をつくること、われわれの使命であり、全てがそれに向かって力を結集されなければならない。

そのために、まだ建築、施設など充分でないので、五十年では柏心館の三階に、視聴覚

この教育の目的が達成されるものであることは論をまたない。

(高等学校長・浦野 信夫)

香里中・高等学校



館 誠 明

百周年を迎える同志社の中にあつて、比較的歴史の浅い本校は、昭和十四年に大阪の偕行社中学として設立が決定されたものである。

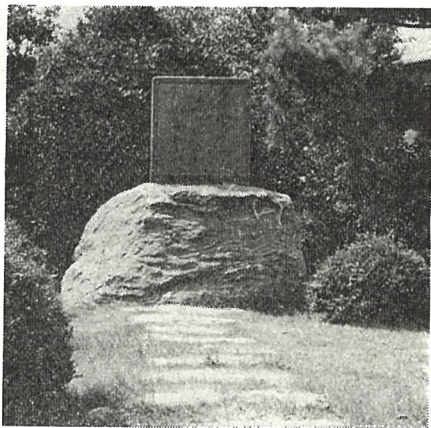
当時は日支事変の戦局も拡大し、特に出征陸海軍関係の子弟教育に困難をきたすようになってきたので、偕行社小学校に偕行社中学校を併設することになった。しかし、いつまでも同居することはできないので、浅井さく氏、その他の公益献金を設立資金として、現在の香里の地に校舎を建設することが決定され、昭和十五年に設立認可があつた。戦局はいよいよ重大化し、校舎建築も困難になってきたが、山下亀三郎氏の、陸海軍軍人子弟教育を目的とする、山水育英会が組織されたので、偕行社中学も山水育英会と合併提携することとなり、昭和十六年に第二山水中学校として発足した。戦時中は枚方工廠で作業に従事し、余暇を利用して授業がおこなわれたのは、一般の中学校と同様である。

昭和二十年八月、終戦とともに軍との関係を絶ち、財団法人山水育英会により、第二山水中学校として従来の学校教育がおこなわれた。生徒の中には、予科練、特別幹部候補生

より復員したものもあつて、食糧不足の時代とはいえ、勉学には熱の入つたものである。

昭和二十三年四月、学制改革に伴い財団法人香里学園と改称、香里中学校、香里高等学校となつたのである。当時新制中学校は設備その他において十分でなかつたので、本校の中学校に進学するものも多かつたが、中学を卒業し公立高等学校に進学するものが多く、高等学校の充実のため、大学と直結した学園にすることが考えられてきた。また同志社においても、当初大阪に設立する意向を持つており、果たされなかつたので、香里学園との合併が急速に進み、昭和二十六年同志社香里中学校、同志社香里高等学校となつた。

同志社として発足したが、校舎等は建設後十年を経過し、戦後の物資不足も加えて荒廃甚しく改築の必要にせまられたので、八十年の記念事業として計画が進められ、歴代校長の努力により、昭和三十三年に高等学校の普通教室として鉄筋三階建の尚志館が完成した。ひきつづき昭和三十五年、鉄筋四階建、中学教室九、理科・芸術科特別教室、図書館を含む明誠館が完成し、面目を一新した。丁度この時期は高度経済成長とともに、高等学



入口にある良心碑

校に進学する生徒も増加の途をたどり、また、大学に直結した本校などにおいては、一層有利となってきた。体育館も老朽化したので、昭和三十八年にバレー・バスケットコート、卓球、柔道、剣道、レスリングを含む総合体育館と生徒食堂、集会場を含む有朋館が完成した。翌三十九年にはPTAの協力により、二十五メートルプールもでき、生徒の体育指導に一段と効果をあげるようになった。昭和四十一年にL.L教室、地理、社会科教室

の増築も完成し、教学に対する施設はほぼ終った。この頃より、高校の志願者の増加とともに中学の志願者が増えてきたので、中学の学級増が考慮され始めた。高校志願者の中には公立との併願により定着数が不安定であるので、中学五学級、高校七学級として、高校の生徒定着を安定させることが考えられ、中学、高校とも二学級分の増築計画がなされ、同時に地学教室、小規模ながらプラネタリウムを設備した地学特別教室が昭和四十七年に完成した。中学の学級増とともに、中高一も志願者は年々増加した。高校よりの推薦においても着実に伸び、また大学の好意により、最近は九十%強が推薦入学するようになった。

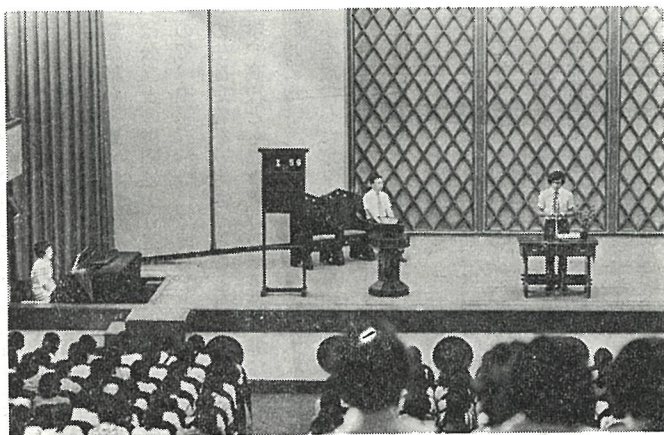
同志社は基督教をもつて徳育の基本としておるので、合併後礼拝を設け、これを通して新島精神の浸透を期待しているものである。昭和四十五年前後の学園紛争の盛んな時期には、礼拝に対し批判的な空気があったが、徐々にともに戻り、今年度より関係教員の努力と生徒の要望で礼拝の充実を計り、大いに効果があがっているものと思われる。

クラブ活動においても、文化部、運動部で三十余のクラブがあり、それぞれの特色を生かし活動している。しかし本校の生徒のように、遠距離通学者が多いため、六割程度しか部に籍を置いていないので、野球、ラグビー等の、チーム組織のものが弱体化したもの、一般高校にみられる状態と一致している。この中であって陸球部はインターハイでベストエイトに入り、陸上、レスリングもインターハイに出場している。また、スキー、水泳等も近畿地方において好成績を収める現状を示している。各クラブが、徐々にではあるが、盛んになってくることは大変喜ばしいことである。

百周年を迎えるにあたり、設立当初よりの建物である講堂、本館の改築の計画を持っている。現在の社会状態から考えると非常に困難であるが、教育環境改善からも是非実現したいものである。これと同時に、図書館の充実と利用効果をあげるため、講堂と同時に考慮したい。教育は必ずしも設備のみではないが、生徒の質の向上がみられるので、教職員一丸となって、よき同志社人を育てるよう念願している。(香里中・高等学校校長・阿南里士)

女子中・高等学校

現在・過去そして未来と基本的に変らない「現況」を最初に紹介します。それは「礼拝」です。学則・教育の目的・本校の特色などに掲げられているように、礼拝はキリスト教教育の基盤をなすものです。特別な宗教行事としての礼拝ではなく、毎日始業前に必ず守られている厳肅敬虔な礼拝です。これなくしては、全校の生徒も教職員もその日の務めが始まりません。これは「形式」ではなく「内容」そのもののなのです。いちおう、学校礼拝は「キリスト教にもとづく宗教的信念と情操の涵養」（学園要覧「本校の特色」）のためではありますが、これは本校の特色を説明する場合



（礼拝風景）

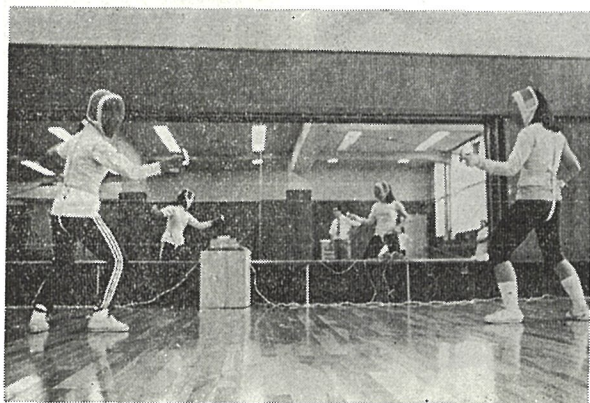
に使った言葉に過ぎません。この毎日の礼拝に中・高六年の間出席する生徒たちには、それぞれの感慨があることと思います。また、卒業生の思い出のなかで、もっとも身にしみ

ているものでもあります。過ぎし日の礼拝の思い出が人生の支えになっていると述懐している卒業生がなんと多いことでしょう。長い年月の間には種々の抵抗や障害もありましたが、開校以来一貫して守りぬかれてきたこの礼拝を、いっそう大切にしていきたいと思えます。また、毎日の授業の終りには「終礼」があります。これは中学・高校の各ホーム・ルームの当番が責任をもって行うものです。一日の課業を感謝をもって終えた証しでもあります。参考までにその守り方の一例を示します。

讃美歌（朝の礼拝の讃美歌）

聖書（生徒手帳に引用されているその週の聖句）
祈禱（司会当番が皆に代って自主的にささげる）

一日の授業が終ると、やがてそれぞれのホーム・ルームから讃美歌が流れてくる。これでその日の学校生活が全く終ったのではなく、放課後にはまた活発なクラブ活動が始まる。クラブの種類だけでも、文化系一三、体育系二四と多様です。今回はその中で、フェンシング・クラブの現況を、クラブ員の生の



クラブ活動
(フェンシング・クラブ)

声を引用してお伝えします。

『フェンシングというスポーツは、そのおもしろさが分りにくいスポーツだと思う。バレーやテニスでは、球をトスしたり打ち返したりしていて楽しいが、フェンシングでは、フットワーク（基本動作の練習）をしていて楽しいとは言えない。私は始めてから五年たった今でこそ、基礎も一応すんで、アタックが決まり、試合に勝ったりして、ようやくフェンシングの楽しさが分りかけているが、中学生の頃は、こんなしんどいクラブなんか止めてしまおうと、毎日考えていた。』（2E 井口昭子）

『最後までダウンせずにやりとげられた後の水の一口は何とも言えないおいしさなのです。いつも単に飲む水ではなくて、本当においしく、水がありがたく感じるのです。たった一口の水が、苦しかった後だからこそ、感謝を心からできる「お水」なのです。』

(3F 猪口賀子)

このようなクラブ活動を通して、生徒たちは青春を鍛え上げて行きます。

最後に、「ゆかり会」のことを少し紹介します。昭和38年に生れた本会は、母校と卒業

生をつなぐ連絡会で、事務室を希望館に置いています。母校を始め、同窓会、後進に対して物心両面の援助を行っています。卒業生の名簿の作製、身体検査などの手伝い。女子高三年生のためには進路相談を設け、各学部ごとに先輩が来て助言を与えます。これなどは在校生にたいへんよろこばれていることです。また例年のバザーでは、タコヤキを自分たちで作って販売します。先輩諸姉の手作りのタコヤキを味わおうと、在校生たちは列をつくって買うのです。バザーでは必ず見られるほほえましい光景です。

このたびは、「礼拝」と「クラブ活動」、そして「ゆかり会」の一端を紹介して現況報告に代えさせていただきます。同志社創立百年を迎えるにあたって、ますます本校がその発展に寄与することを誓う次第です。なお二枚の写真は本校の山田孝雄教諭(理科)の手によるものです。

(女子中・高等学校教頭・太田 幹雄)

商業高等学校



北小松での夏期キャンプ
(1975.7.20)

商業高校は、昭和二十三年（一九四八）四月、将来産業界に、自己の進路を開拓せんとする勤労青少年に対し教育の機会を与えようとして、男女共学、商業科の定時制高校（四年制）として発足した。設立された当初、本校は、今出川校地の聚芳館（大学新図書館建設にあたり取り壊された）にあったが、昭和三十七年（一九六二）四月、大学新町校舎の新築にともない、新町校地に移転し、現在に至っている。

初代の校長は、商学部岡本春三先生であったが、その後も、度々大学より校長を迎えた。現在は、住谷総長が本校校長代行を兼務されている。

このように、同志社内の高校ではきわめてユニークな存在であったが、この度、同志社創立一〇〇周年を迎えるにあたり、奇しくもその三〇年近い歴史を閉じようとしている。

商業高校の今日までの歩みについては、いずれ詳しく述べる機会が与えられると思うので、ここでは簡単に説明したい。

商業高校の創立以来、今日までの過程は苦難の連続であった。昨今、社会的にも定時制生徒数の全国的な傾向として、減少の一途を

たどり、本校も、例外ではなかった。したがって、京都府下でも数校あった私学が相次いで閉校となり、本校が唯一といってよいほどの存在であった。（一）燈園高校が定時制高校として残っているが、特殊な存在で、生徒数も以前から少なかった。また、職業高校の存在も全国的に大きな問題として取り上げられている。その一つに、職業高校から大学への進学が不利であることがとり上げられている。しかし、この点では、本校は同志社大学無試験推薦入学の道が開かれ、毎年三割前後の卒業生を大学へ送り出すことができ、幸いであった。

一方、本校独自の問題としては、経営の悪化、校舎が併用であるため特別教室の不足を来し、また、大学紛争の影響もともに受け、昭和四十四年には、本校も封鎖され、外部で分散授業を余儀なくされたこともあった。

そして、ついに昭和四十八年以降の生徒募集停止が決定され、現在の生徒は、四年生のみで二五名内女子七名である。かつて生徒数のもっとも多かった年は、昭和三十四年の六九三名であった。専任教職員も、以前は、一七名であったが、配置転換等により、今年度



早天祈禱会にて
(1975. 1. 23)

は七名である。

このような極端な少人数の規模になると、学校運営上、いろいろな困難な問題が生じてくる。たとえば、もっとも苦勞するのはクラブ活動である。高校教育の段階では、クラブ活動の意義はきわめて大きい。殊に同志社では大学推薦制度があり、その効果を十分に発揮できる環境にある。しかし、このような少人数になると活動の条件がきわめて悪い。特にチームを編成するクラブでは、生徒たちも選手集めに四苦八苦している。これには学校としても、有効な手を打つことができず弱っている。また、授業運営の面からみると、確かに生徒数が少ないので、教員の目がよくいき届き、生徒と教員とのコミュニケーションもうまくいく。しかし、選択科目については、極端に少人数の科目が出て、活気の点で欠けるところが目につく。この外、文化祭や球技大会等の行事についてもむつかしくなっているが、教員たちも積極的に参加して盛り上げるよう苦勞している。

以上、簡単に現況等を述べたが、同志社がたとえ短い期間にせよ、働किながら学ぶ勤勞青少年のために、門戸を開放し、教育の機会

を与えたことは、きわめて大きな意義があったと思う。現在卒業生が社会の各分野で活躍し、商業高校のなくなること非常に残念がつている。私たち教職員は、将来同志社が、また、なんらかのかたちで、これら勤勞青少年に対し、同志社の精神にふれることができる機会を与えられることを心から願っている。

(商業高等学校教頭・土山 登)



中学校



蛙の解剖 ——生物実習——

本校は昭和二十二年の学制改革に伴い、男女共学、単独中学校として再発足しました。

在校生は九七二名（男子六二一名、女子三五一名、一学年八クラスの二十四クラス編成で、一クラス四十名の男女の比率は約二対一となっています）。

教職員は六十三名（教員五十名、職員十三名）で、きめ細やかな教育を目指し、生徒との触れあいを大切にしたいと願っています。

毎朝、十五分間の礼拝を伝統あるチャペルでまもり、その後四十五分、六時限の授業に入ります。

なお、カリキュラム（教科課程）は下記の通りです。

校務組織としては、宗教部、総務部、教務部、生活指導部、生徒部、保健部、図書部の七部があり、他にクラス担任は、各学年ごとに担任会を持ってクラス指導に当たっています。

学校行事のうち、特色あるものとしては、花の日礼拝、収穫感謝礼拝、クリスマス礼拝等の特別礼拝、春秋の宗教週間行事等の宗教

本校のカリキュラム

（1週当りの授業時間数）

		1 年	2 年	3 年
聖	書	1(1)	1(1)	1(1)
国	語	5(5)	5(5)	5(5)
社	会	5(4)	5(4)	4(5)
数	学	4(4)	5(4)	5(4)
理	科	4(4)	4(4)	4(4)
音	楽	2(2)	1(2)	2(1)
美	術	1(2)	2(2)	1(1)
保 健 体	育	3(3.5)	3(3.5)	3(3.5)
技 術 家 庭	共 同	1	0	0
	男 子	1(3)	2(3)	2(3)
	女 子	1	2	2
外 国	語 (英)	6(4)	5(4)	6(4)
特 別	活 動	1(1.5)	1(1.5)	1(1.5)
計		34(34)	34(34)	34(33)

（ ）の数字は、文部省の指導要領に示めされた時間数。但し聖書の項の（ ）内の1は道徳教育。

行事の外に、春に行う合唱コンクール、あるいは球技大会があり、学年別クラス対抗で研を競い、大いに盛り上がりがあります。又、夏には、一年生は丹後由良にある臨海学舎で、二クラスごとに二泊三日のキャンプを、二年生は信州唐松岳登山や自然観察に三泊四日のキャンプを持ち、三年生は、夏と冬に分れ、夏は日本アルプス登山、冬は戸隠高原でのスキー教室を有志参加の形で持ちます。秋には、



百井より花背峠へ

——耐寒遠足——

学園祭として、展覧会、学芸会、運動会を開催し、冬には、二月上旬の一番寒い頃をねらい、耐寒遠足として雪の中を大原から鞍馬へと山中を歩きます。これらはいずれも中学生時代の懐かしい思い出としてあとあとまで心に残る模様です。

生徒会活動も非常に盛んで、受験学習に禍されない好ましい一面と言えますよう。

生徒会は執行部を中心に、公安、美化、庶務各委員会があつて、それぞれに活動し、又、ホーム・ルームから出る評議員をもつて

構成する評議会は生徒会執行部とホーム・ルームとの緊密な連携に努めています。学園祭、球技大会等も生徒会の中に実行委員会を設けて自主的に企画運営をしています。更に、生徒会クラブは、文化芸術関係クラブ十九部、運動関係クラブ九部を擁し、在校生徒の八十八%に当る多数の生徒たちが、何らかのクラブに所属して活発に活動しています。

施設としては、まだ充分とは言えないまでも、チャペル（三九二坪）、一九六三年重要文化財指定、体育館（一、〇二四坪）、運動場（六、六〇〇坪）等、都心にある学校としては恵まれていると言えますよう。

他に、普通教室二十四室、特別教室十三室（化学、物理、生物、地学、音楽、美術、社会、洗染調理、被服、技術、製図、電気、更に、図書館、各校務部室、教員室、会議室、放送室、更衣室、倉庫等となっています）。

生徒状況、寮を持たないためもあって、遠隔地からの生徒はほとんど無く、他府県からの通学生は、滋賀県、大阪府、奈良県に限られますが、人口分布のドーナツ化現象に伴い、府下からの生徒は漸増の傾向にあります。

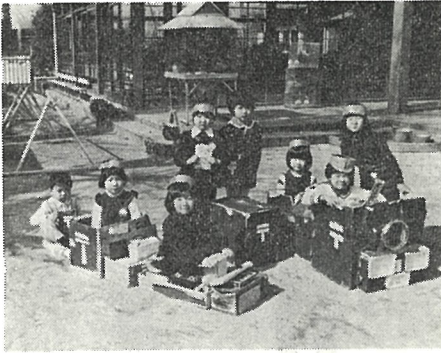
入学志願者は募集定員三二〇名に対して、漸増を続け、四十九年度は八七〇名（男子六〇五名、女子二六五名）、五十年度は九七五名（男子六七六名、女子二九九名）となっています。

進学状況としては、卒業生はほとんどが同志社高校へ進学し、他の公・私立高校への進学は数名に止まっています。

以上が本校の現況ですが、詳しくは、学校要覧を新しく作り、これに記載しておりますから御高覧頂ければ幸いです。

（中学校教頭・市谷 經哉）

幼稚園



園庭の子供たち

同志社幼稚園は、明治三十年出町幼稚園として創立され、以来七十八年の歴史を持っています。名称はその間、今出川幼稚園から現在の名称へと変りましたが、一貫して幼児教育の本質への追求・実践がなされ続けていると思います。

幼稚園の先生方が、折りにふれ、よく口にする言葉に、「強い」というのがあります。「強い心で」とか「強い身体になって」とか、園児たちへの語りかけの時、あるいは朝の礼拝のお祈りの中で繰り返されます。ここで言われる「強い」とは、一義的な意味での「強さ」ではなく、幅広い深い内容を含んでいます。年少の園児が何かで困っている時、年長の園児がそれを助ける「いたわり」も、年長児の「強い」心のあらわれであり、又、年長児を尊敬するのも年少児の「強い」心なのです。

誕生日、皆の前で祝福される園児に対し、子どもたちは、口ぐちに彼、あるいは彼女の「強い」ところを披露します。「足が強い。何故なら彼は、よく人を蹴とはすから」とか、「彼女は口が強い。おしゃべりだから」とかいった脱線もたまにはありますが、子どもた

ちは入園以来、本当に「強い」子どもになるよう努力しています。この言葉は、自主自立・協同・自我抑制といった幼児期の発達課題の達成の指導に、誠に適切なものといえましょう。

*

*

幼稚園の現状を、一年の諸行事を通して述べてみます。

入園式に始まった一学期は、八月上旬六日のサマースクール(夏期保育)で終りとなります。その間、春の遠足を行います。父兄は参加しません。そのため、先生方の目が園児たちに十分届くよう、年長組と年少組との都合二回の遠足となります。三歳の新入園児にとって、生れて始めて経験する「遠足」はどんな思い出となるでしょう。植物園の門前でお母さん方の見送りを受け、並んで入る時、いつもと勝手が違い、泣き叫ぶ子もいます。七月、夏休みに入る最後の日はお遊戯会で、お母さん方の前で歌やリズムバンドの演奏をします。いわば学期の締めくくりの日と言えましょう。まだ幼いままでですが、それでも人園当初に比べ成長のあとが見られます。

二学期は行事が多く、その上運動会や秋の



保 育 風 景

遠足などお天気に左右されるものがあって先生方は大変です。園児も母親も参加する、女子部合同のバザーもこの時期に行われます。運動会では年長児と年少児の差がはっきり出るようです。それは競争心です。年長児になると競争心旺盛で、一歩でも速くとスタートに焦り勝ちの子どもが見られます。いつぞやの運動会では、障害物競争の中の蛇腹くぐりの所で、もぐり込んだ時は、確か先頭は男の児だったはずなのに、女の児が先に出て来たのには唖然としました。年少児組の競技では、お母さんがハッスルされるようです。二期はクリスマスで終りになります。

三期の行事では、卒園式の他に別れ遠足があります。園児と母親全員が一緒に半日を過す、卒園組と在園組との惜別の会です。この頃から、卒園する子どもたちは小学校に期待と希望を抱き、在園組は新入園児の先輩としての役割を自覚してきます。来春は第七十九回の卒園式を迎えます。

幼稚園の行事としてはこれらの他、年間二回の授業参観と毎月のお誕生日会が行われ、教師と母親との交流の場になっています。ただし、園児数一〇〇名(三歳児二十二名、

四歳児四十一名、五歳児三十七名)、四学級の構成。教員は五名(園長を除く)です。

*

*

今春から保育時間の延長を実施したり、月一回全員が昼食を摂る日を新設したりしました。これらは以前から懸案としてきたものです。積極的で、やる気十分の先生方ばかりです。ですから、保育内容は今後ともますます充実して行くことでしょう。

手狭な園舎で、設備も十分とは言えませんが、良い環境と良い伝統を生かし、楽しい幼児教育の場としての同志社幼稚園であるよう、これからも努力して行きたいと思っています。

(幼稚園長・渡邊 英一)

